
踊れ その果てで*エデンの園

河野 る宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

踊れ その果てで*エデンの園

【Nコード】

N4498Q

【作者名】

河野 る宇

【あらすじ】

*信じるものなどありはしない。俺の望みを誰が叶えてくれると
いうのか……ただ1つ俺は願っていた――

小説サイト「野いちご」にも投稿させていただいている作品です。

第1章 ハンタードッグ（前書き）

* 瀬田一郎さまとのコラボ小説です。続編もあるので皆様どうぞ読んでみてくださいです。

第1章 ハンタードッグ

「……」

男は高い塀を見下ろす。

塀の中はとても暗く、夜だというのに街灯も無く塀の上部に一定距離で設置されている薄暗いLEDライトだけが中に向かって照らされていた。

持っているグラスの中の琥珀色の液体。乱雑に割られた氷が浮かんでいるその酒をぐいと飲み干し、ベランダから見える風景と星空を一瞥して部屋に入った。

「！」

リビングテーブルに乗せられた携帯が震える。男はそれに軽く舌打ちをして乱暴に手に取った。

<戒、仕事だよカイ>

「少しくらいゆっくりさせろ」

<仕方ないだろ>

通話を切って再び舌打ち。色あせた肩までの黒髪と、赤が濃く映し出された黒い瞳。男は、かけられている薄い生地で作られた草色のコートを奪うように掴み部屋をあとにした。

* 戒 - カイ -

「！」

ぶつきらぼうに入ってきた30代後半と見受けられる男に、その青年は軽く手を挙げた。

「呼びつけるな」

「お得意さんだよ」

複数のディスプレイが並べられた部屋。どこかの敷地を映し出しているようだ。この部屋はモニタールームである。

常に10数名ほどが『とある場所』を監視している。

「はい」

青年が何かを手渡した。男はそれを受け取り右耳に装着する。右耳にあるボタンを押すと右目の前にある小型のディスプレイに文字が映った。

「……5人か」

「よろしくね」

「今、何人が『牧場』の中にいる？」

「んゝ多分、3人ほどかな」

そうか……男はつぶやいて装備している武器を確認していった。

「相変わらず旧式が好きだね」

男の武器を眺めて青年が発する。今時、リボルバー銃とクリスダガーなんて……と薄笑いを浮かべた。

「だから客が満足するんだろ」

淡々と応えモニタールームから出て行く。

「……」

男は、先ほどまで見下ろしていた分厚いコンクリートの塀を見上げる。

< 戒、^{カイ}派手によろしくね >

「解っている」

片眉を上げて、右耳から聞こえた声にうつとうしそくに応え監視員が開いた合金製のドアから塀の中に入ってしまった。

「……」

右目のディスプレイから流れる情報を視界に捉えながら、夜の敷地内を歩く。5人……全て片付ければかなりのポイントが稼げる。そんな事を考えながら進む。

「！」

ディスプレイがターゲットを確認した。すぐ近くだ。

「オスカ……面倒だな」

戒は黒い物体を右手に持ち、少し強く握った。

鉢合わせした瞬間――

「ぎゃふっ!？」

甲高い音と共にターゲットは後方に少し押されるように揺れて胸から血しぶきが飛んだ。

「……」

ゆっくりと倒れる男を戒は静かに見つめる。死んだ事を確認すると、次に示されているターゲットを追った。どうやら女のようなのだ。

戒はリボルバー銃からクリスダガーに持ち替える。それは波形に形作られた芸術性の高い刃物。

「……」

無骨な灰色のコンクリートで造られた1階のみの建物の並びを確認し、素早く駆け寄る。

「ヒッ!？」

背後から女の口を塞ぎ、その細い首にダガーの刃を滑らせた。鮮やかに飛び散る血が、前のめりに倒れ込む女の背後にいた戒にもその跡を残す。

それでも男の表情は変わらなかった。

「あれがキミのお気に入り？」

モニタールームで、戒の様子を眺めながら1人の男が青年に発した。

「うん」

青年はその男を一瞥し、嬉しそうに再びディスプレイに目を向ける。ここは、広大な敷地にある『クローン牧場』と呼ばれる施設だ。首都の近くに空港の建設計画が持ち上がったが頓挫し、計画は廃止された。その土地を、とある組織が買い取った。合法的ではないクローン作成を生業としている。

違法であるにも関わらず彼らが摘発される事は無い。そのクローン技術は高く、彼らを裏で支えているのは権力を握っている者たちだ。

これほどの広大な土地を、一部の特殊な趣味の金持ちたちのために組織は『狩り場』として使用している。

この時代、クローンは臓器移植のためのものとして作成を許可されている。そして、貧困層にある者たちはその細胞を売り日々の生活の糧にしていた。

その細胞をどうするのか——そこからクローンを作成し、狩りの獲物として『牧場』に放つのである。

金持ちたちは獲物が殺される様を眺めて満足する。満足のために、『ハンタードッグ』という職業が生まれた。

彼らは1人殺せばポイントが貰え、1人殺していくごとにポイントが加算される。そのポイントに応じて彼らには報酬が与えられる。金のため、夢のため……思いはそれぞれだ。

ハンタードッグを雇っている組織はいくつか存在する。戒はそのうちの1つと契約していて、組織のシステムは各組織によって異なる。

もちろん、戒は本名ではない。この組織では本名を名乗る者はほとんどいない。それは自責の念なのかどうかは解らない。

クローンの殺し方はまちまちだ。金持ちたちの要望に応じて各組織がハンターとターゲットを指定する。クローンの情報は組織同士

で共有しているが、ターゲットの情報交換は一切無い。

識別チップの埋め込まれたクローンたちをヘッドセットの情報から探し至る所に設置されているカメラが監視と殺しの光景を捉える。ターゲットの情報交換がなされないのには1つの理由があった。同じターゲットが示された時、そこには想定外の闘いが繰り広げられる――そのイレギュラーも金持ちたちは楽しんでいた。

聞いているだけで吐き気のするような話だが、それが淡々と行われている世界が“ここ”なのだ……

金持ちたちのクローンは別の場所で、臓器移植のために大切に保管されている。

今回、敷地内に入っているハンターは戒の他に3人いるようだが鉢合わせは避けたい。余計な闘いは面倒だ。

「……」

その青年、組織のトップに位置する男は戒の姿を見つめて恍惚とした表情を浮かべた。茶色がかった黒髪とダークグレーの瞳。20代後半だろうか。

「彼は美しい。そう思わないかい？」

青年の言葉に、男は肩をすくめて後ろを向いた。

「……」

どこが美しいんだか……ディスプレイを一瞥し、男は小さく溜息を漏らした。やせこけた頬に無精髭。常に何かを睨み付けている瞳は血が固まったような色をしている。

見つめられると意味もなく身震いしそうな瞳だった。

＊翼という男・つばさというおとこ・

「！」

ひと仕事終えた戒は、ハンターたちの集まる組織の建物の一室に足を踏み入れた。そこはいくつかの長机にパイプイスとコーヒーマーカ―が置かれただけの、ある程度の広さがあるコンクリートの壁の部屋だ。

あまり話のしないハンターたちだが、何故か1人だけ戒に親しく接する男がいた。うつとうしく思いながらも、その青年にきつくあたる事もなく戒は彼の話にいつも耳を傾けていた。

「今日も仕事だったの？」

「ああ」

コーヒ―の入ったカップを長机に乗せタバコを1本、取り出す。

その青年――翼と名乗っている男は戒の目を見つめニコリと笑った。

「今度さ、近くの店に行かない？」

翼の言葉に戒は眉をひそめた。

「お断りだ。クローンを抱く趣味はない」

「えー？ 可愛いコがいるのに」

売れない女優が細胞を売って、そんな女たちのクローンがひしめく店がある。クローンを扱っている店は風営法にひっかかる事がない。

「戒ってストイックだよねえ。ホモってウワサもあるけど」

「今度言ったら殴るぞ」

眉間にしわを寄せて発する戒に翼はケタケタと笑った。

「ね、戒はなんのためにこの仕事してるの？」

翼はあどけない顔で戒に問いかけた。長い黒髪を後ろで1つに束ね、まだ幼さの残る顔立ちを斜めに向けて戒を見つめる。

「さあな」

「えー教えてくれないの？」

「お前はとうなんだ」

「僕はねえ……」

持っていたコーヒーの紙コップをいじりながら目線を外した。
「故郷に両親がいるんだ」

「！」

少し、青年の黒い大きな瞳が愁いを帯びる。

「お金を稼いで、どこか別の国で暮らしたいな。両親と」

「ハ……どこも同じだ」

「！　そうかな」

戒は呆れたように、もう1本タバコを取り出す。

「ね、戒は他の国に行った事があるの？」

「……昔、一度だけな」

翼はそれに口笛を鳴らした。海外に行ける者など多くはない。富裕層と貧困層との格差は確実に開いていた。

「俺の金じゃない。運が良かっただけだ」

「どこに行ったの？」

「……どこだったかな」

戒は少し考えるような仕草をしてとぼけるように応えた。翼はそれに、むくれた表情をしてまた笑う。

「もー、戒ってばいつもそうなんだから」

「ずっと昔の話だ」

戒は立ち上がり翼に別れを告げてマンションに向かった。ポイントをここの家賃にも使っているため、貯まるものも貯まらない。

最低ポイントで借りたマンションだが他の家に比べれば快適だ。

「……」

ベランダから見下ろす風景は最悪だが……とつぶやいて風呂場に足を向けた。本来、上の階に行くに従って価格は上がっていくものだが、『牧場』を見下ろす部屋は安い。

結局は、見たくないものには目を背けていただけなのだろう。そう思うと、何故か口からは舌打ちがついて出る。

『お前だつてそうじゃないか』

そんな言葉が聞こえてきそう、戒は薄笑いを浮かべた。

「今度はなんだ。真仁^{まひと}」

次の日、戒は再び青年に呼び出された。少し怒りを帯びたその瞳を嬉しそうに見つめて真仁は応える。

「面白いショーに参加してみない？」

「ショー？」

戒は怪訝な表情を浮かべて真仁をやや見下ろした。

「どっかの組織がさ、兄弟同士の殺し合いを計画してるみたいなんだ」

「！ハンターのか」

「それで、そのイレギュラーも欲しいんだってさ」

「断る」

即答した戒に、驚く事もなく解っていた回答に目を細めた。

「君が断るなら翼に頼むけど」

「何……！？」

静かな空気が流れる。電子音が定期的に響き、時間が止まったような錯覚に囚われる。

「15ポイントだそうだけど、イレギュラーは1人につき5ポイント」

「随分と下がったな」

「仕方ないよ」

「ふむ……」

戒は数秒、思索した。

「……いいだろう。詳細を話せ」

真仁はそれに口の端をつり上げる。

「持ちかけられた話だと、ハンターたちに話すのは3日後だそう。ターゲットの指定は今回クローンじゃなくてハンターだからチップは無い」

自分で探してね。と付け加える。

「少しくらい情報はくれるんだろうな」

「こちらが捉えた映像で大体の位置くらいは教えるよ」

そして戒に向き直り肩をすくめる。

「まあ、君の腕なら問題ないだろ」

「言ってくれ」

苦い顔を向けた。

「ああ、それと」

モニタールームを出ようとした戒に、真仁は付け加えるように呼び止める。

「カートリッジ（銃弾）はホローポイントを使ってね」

「！　なんだと……？」

戒は眉をひそめて青年を睨み付けた。

「最近使ってないだろ？　派手にやってもらわなくちゃ困るんだよ」

「……」

何も言わない戒に真仁はニヤリと口角を上げる。

「ホローポイントは戦争に使っちゃいけないカートリッジだけど、

これは戦争じゃない。それに……」

戦争はそれよりも酷い武器を使うのに、ホローポイントは使用禁止だなんておかしい話だね——真仁が悪魔のような微笑みで言い放った。

「……」

戒は無言で廊下を足早に歩く。かつて使用していた『ホローポイント』と呼ばれるカートリッジの事を考えていた。

「必要以上の苦痛を与える」として、拡張弾であるホローポイントはかなり昔に戦争では使用禁止となった。

先端に穴の空いたカートリッジ。目標物に当たれば先端がキノコ状につぶれ、体内を暴れ回る。

この仕事を始めた当初、戒はそのカートリッジを使用していた。苦しみで悶えるクローンを冷ややかに見つめる姿に、戒の人気は上がったのだ。

「……」

マンシヨンに戻り、どこを見るでもなくリボルバーをいじる。レコンの形をした薬室のシリンダーをスライドさせ無造作に回す。カラカラというその音だけが部屋に響いていた。

「……っ」

何かを思い出し、苦い表情を浮かべる。リボルバーを目の前のリビングテーブルに乱暴に投げ置き、両手を組んでうつむいた。

幾度となく心を締め付けた思考が戒をゆるゆると支配していく。

『過去からは決して逃げられない』

いつからだろうか、感情を押し殺したのは……そうだ、恋人を亡くしてから俺は笑う事も泣く事もなくなった。もう、何もかもが疎ましく憎かった。

のうのうと生きている自身にさえも、表しようのない感情が宿った。

何度、己の体に刃を走らせただろう。突き立てただろうか——なのに、死ぬまでの傷を負わせる事はない。

そんな自分をさらに憎んだ。そうしている間に、心は凍り付き死を求めてこの仕事に就いていた。幾度となくハンターと同じターゲットを狙い、闘ってきた。だが、まだ生きている。

何故、死ねない……苛立ちが心を埋め尽くす。そんな事を繰り返す、戒は悪夢を見続けているのだ。

第2章　修羅の中に

「！　戒が……？」

翼は聞いた話に呆然とした。2日後に行われる余興に戒が参加する。これが上手くいけば、戒はさらに人気を上げる事になるだろう。

「チツ……またあいつか」

「真仁のお気に入りでかなまひと」

他のハンターたちは、そんな戒が羨ましくて舌打ちをする。だからといって自分たちが彼に勝てるとは思えない。

そんな意識がハンターたちから見え隠れしていた。

「……」

しかし、翼だけは頭を垂くされて無言で床を見つめる。

「お、お出ましたぜ」

「！」

誰かの声で頭を上げる。戒が部屋に入ってきていた。

「か、戒……！」

「！」

戒はその声に翼に目が留まり、少し眉間にしわを寄せた。駆け寄る青年の顔は険しい。

「なんで受けたの……？」

「……仕方がない。俺たちは雇われだ」

押し殺して発した。

「！　そか……そうだよね」

翼は納得しきれないが無理矢理、納得するように目を伏せる。

* 老犬

「戒^{カイ}」

「！」

そんな彼に誰かが声をかけた。振り返ると、老齡の男が戒に軽く手を挙げていた。

「！ 烈^{レツ}か」

烈と呼ばれた男は、その年齡にふさわしい笑みを浮かべゆつくりと戒に歩み寄る。

「！ 仕事を辞める？」

「うむ」

白髪交じりの男は戒の言葉に小さく頷いた。

長机に腰掛けた3人はコーヒーの入った紙コップを傾けて会話を交わす。

50代半ばだと思われる烈という男は、少し笑って続けた。

「もう年だ。これ以上は体がついてこん」

「……」

「戒、私の名前は瀬^{せき}木 理^{おさむ}という」

「！」

戒は驚いて目を見開いた。

「何故……」

「あんたにだけは言っておきたかった」

その言葉に戒は再び驚きの表情を見せた。そんな彼の表情を一瞥^{いちべつ}し、烈は薄く笑って宙を見つめる。

「どうして我々が名前を騙^{かた}めるのか……考えた事があるか？」

烈（瀬木 理）はつぶやくように口を開いた。

「理由は人それぞれだ。私は……人としての自分を壊さないためだった」

『相手はクローン。同情の余地など無い』

そう思えば思うほど、何故か虚無が心を襲った。そんな割り切った心と、割り切れない心とがせめぎ合う。

「お前さんにも、理由はあるんだろう」

「……」

「お前さんはまだ若い。私のようにはなりなさんな」

もうクローンを殺すのに疲れたんだよ……瀬木はそう言って、背中を小さく丸め部屋から出て行った。

「……勝手なこと言いやがって」

戒は苦々しく入り口を睨み付け舌打ちした。

「戒がここにいる理由って、恋人が死んだとか？」

「!？」

翼の言葉に戒は目を丸くする。

「割と多いから……そういう人」

「知ったふうな事を！」

戒はそう言い放ち部屋をあとにした。歩きながらヘッドセットを装着し扉の前に立つ。

いつでも浮かぶのはかつての恋人の微笑み。救えなかった自責の念が襲う。戒が悪い訳ではない、あれは仕方のない事故だったのだ。彼が特殊部隊に勤務していた頃、日本を離れる仕事に就いた時だ

——彼女が出かける時はいつも戒が車の運転をしていた。

しかし、彼がいない時は彼女は自分で運転する。彼女が両親の家に向かう途中、対向車線を走っていた車が信号無視で右折してきた。彼女はそれを避けきれず、ともに相手の車とぶつかり……帰ってきた戒に見せられたのは彼女の冷たくなった遺体。

「あんたが悪い訳じゃない……でも、恨まずにはいられないんだ」

彼女の父が言った言葉は戒の胸に突き刺さる。

「菜都美……」

綺麗に整われた遺体の頬に指を滑らせた。艶やかだった背中までの黒髪に輝きは無く、ハリのあった肌は青白い。

漆黒の宝石を思わせる瞳にも光は失せ、冷たいまぶたに隠されていた。

「――っ」

戒は声にならない叫びを上げ、そのままへたり込んだ。それから数ヶ月後、彼女の両親は菜都美の後を追うようにして病気で立て続けに亡くなってしまった……父は最後に「あの時はすまなかった」と言い残して息を引き取った。

娘の死に、誰かを恨まずにはいらなかった事くらい解る。彼女の母は彼に多くは語らなかったが、やはり憎まずにはいらなかったと思う。

「――」

そんな物思いにふけていた戒の頬に、冷たい水の感触。

「チツ……」

雨まで降ってきやがった……口の中でつぶやき、重たい扉の向こうに姿を隠す。今日のターゲットは4人。3人殺す時には雨は音を立てて地面を濡らしていた。

塗れた服に体力を奪われる。最後の1人を早く殺して酒をあおりたい。

「――」

そう思った戒のディスプレイにターゲットの表示。足音に注意して近づいた。あと数メートルといった処で、右から影が飛び出してくる。

「――!?」

ハンターか!? 戒はすかさずリボルバーを構え壁を盾にした。相手も同じような動作で壁に体を隠す。ターゲットがかち合ったか……戒は舌打ちして、相手の様子を窺う。

「――」

その戒の顔近くに相手の銃弾が壁に当たって弾かれた。

「まひと
真仁」

< かち合っちゃったね >

「情報をくれ」

< ほう >

戒のディスプレイに相手の後ろ姿が映し出される。至る所に設置されている隠しカメラの利用はどう使おうと自由だ。

真仁は、戒の動きがより狡猾ことうかつに美しくなるなら喜んで提供する。

戒は、映し出された相手の後ろ姿をじっと見つめる。

「……なるほど、押していくタイプだな」

ならば……戒は腰の背後に装備されているもう1つのハンドガンに手を伸ばした。大きめのグリップに顔をしかめる。

「多少の怪我は我慢するか」

そう言って、勢いよく壁から離れた。

「！」

相手の男は、それにハンドガンの引鉄ひきがねを引きまくる。それをモニタールームから見ていた真仁は喉の奥から笑いをこぼし、画面に見入った。

「クク……そんなの戒には当たらないよ」

口の中でつぶやき、戒を見つめる。

「……っ」

雨でぬかるんだ地面は動きを鈍くさせる。戒は足を捕られないように注意しながらハンドガンを構えて駆け出した。

1発、放てばいい——外さないようにしっかりと照準を合わせ、反動を考慮して引鉄を引く。

「ぎゃあ!？」

男の声が上がる前に、その弾丸は男の右肩を破壊した。

そのオートマチック拳銃『デザートイーグル』を仕舞い、リボルバーに持ち替えて男の頭に銃口を向ける。

「ひっ……ひっ……」

痛みで目を見開き、もはや苦しみのみが男を支配していた。

「……」

戒はそれに苦い表情を浮かべ、引鉄をゆつくりとしぼる……乾いた音が響き、男は力なく横たわった。

「クク……さすがだね、戒」

<ごたくはいい>

「はいはい」

言いもつて、真仁は画面に映し出される戒に恍惚^{ムリウツ}な眼差しを向ける。

「……っ」

戒は左腕に眉をひそめた。男の銃弾がかすつたらしい、コートに赤い染みを作っている。

血縁同士の殺し合い……それが行われるのは明日だ。イレギュラーとして参加するハンターはそれぞれの組織から10人ほどだと言っていた。

今度こそ、俺は死ねるのか……？ 最後のクローンの胸にナイフを埋めながら、戒は複雑な瞳を見せた。

「……」

そんな戒を他のクローンたちが遠巻きに見つめる。

ここに詰め込まれているクローンたちは、戒たちハンタードッグを牧場に現れる野犬のように感じている事だろう。

次に命を残す事を許されないクローン。そのため彼らは風俗店では重宝されるのだ。元々、人として扱う事のないクローンに生殖能力など与えるハズもない。

『牧場』に放たれるクローンがむやみに増えられても困る。

「あの戒つて男、自衛隊の特殊部隊にいたんだって？」

「そうだよ」

モニタールームに再び訪れた男が真仁に話しかける。すました顔の30代前半と見られる男は、戒の映像を確認している真仁の後ろ

姿を見つめた。

この男の名は橋場^{はしば} 直貴^{なおき}、真仁の組織のスポンサーの1人だ。貿易を手がけていて金はある。

「隠された国の組織だね。金がかかるとかで解散になって、自衛隊に残るか退職するかを訊かれて退職したそうだよ」

「だから、あんな動きなのか……」

戒の動きは明らかに他のハンタードッグの動きとは違っていた。

「体格も良い方だろ？ だから、人気が高いんだ」

ボクは運が良かった。と、口角をつり上げる真仁。

「よくもボクの組織を選んでくれたよ」

目を据わらせて喜びの表情を浮かべる。直貴はそんな真仁に少々、呆れ気味だった。

「そんなにあいつは特別なのか？」

直貴がそう訊ねると、真仁は少しキョトンとした。

*その理由

その顔は「そんな事も解らないの?」と言っているようで、直貴なおきはややムツとする。

「そうだね……」

真仁まひとは彼の魅力をどう伝えようかとはばらく思案した。そしておもむろにパソコンの1つを操作し映像を映し出した。

「よく見てね」

「……?」

戒カイのVTRだ。背後からクローンに忍び寄り、口を塞いで後ろから腕を回し胸にナイフを突き立てている。

「ほら! ここ。クローンの腕」

一端VTRを止めて指を差す。

「痙攣けいれんしてるな……それがどうした」

真仁はその映像を確認させ、得意げに話し始めた。

「この時、クローンはもう死んでるんだよ」

「! なんだつて……?」

「彼は、意図的にカメラに写るように痙攣けいれんさせてる」

「……そんな事が可能なのか?」

直貴はディスプレイを再び見つめた。

「カメラの角度が悪い時は、ヘッドセットに仕込まれているCCDを使うんだ」

彼は人体の構造を熟知してるんだよ……真仁は淡々と続けた。

「どういう刺し方をすれば痙攣するかとか。どんな撃ち方をすれば自然に体が震えるのかとか。特殊部隊にいた時の訓練だね」

「?」

直貴は首をかしげた。

「彼がいた特殊部隊は隠密行動おんみつこうどうをメインとしていた部隊だよ。その逆を学ぶってワケ」

いかに速やかにターゲットを沈めるか。作戦を遂行出来るか……なるべく動かないように仕留めるためには、人体について学ばなくてはならない。

クローンは、その技術が開発された時代よりも安価に作成可能となった。それにより世界情勢も多少の変化を見せ日本もそれに合わせた団体を秘密裏に組織したが、実際の処は大して利用価値もなく経費がかかるだけだと判断し解散の決定がくだされた。

「他にも何人か特殊部隊に所属していたハンターはいるけど、戒ほどの腕は無い」

まさに、天性のもの……だね。真仁は目を細めてささやくように発した。

「派手な殺し方はしないけど、生物の最後の断末魔を彼は映し出すんだ」

「コアなマニア向け……って訳か」

「そういうコト」

あの動きは他のハンターには見られない。

「お得意さんたちからはジャッカルとか黒豹とか。『ニンジャ』って呼ばれてるみたい」

「ニンジャ……？」

直貴は眉間にしわを寄せる。

「外国人のお客もいるんだ」

「ああ……」

なるほど。と感心する。

「使ってる武器も他のハンターとは違う。そこに新鮮さを感じるらしい」

「変態どもの感覚なんて俺には解らんね」

肩をすくめて言った直貴にクスツと笑う。

「彼のクローンが欲しいって言った客もいたけどね」

「！ 造ったのか？」

「いいや」

「どうしてだ……？」

怪訝な表情を浮かべた男に、真仁は目を向けずに応えた。

「大金を出すと言った客もいたけど、そうすると『こっち』の稼ぎが減ってしまう」

「？ 狩りと玩具は違うものだろ？」

「人はどこで満足するか解らない。新しい楽しみを知って、方向転換しないとも限らないだろ？」

その時だけの金よりも、継続される金の方が大事な。真仁は薄笑いで語った。

「まあ、彼が死んだらクローンでも造って売りさばくよ」

この時代、クローンをある程度まで成長させる事が可能なのである。

「しかし……」

直貴は眉をひそめディスプレイを一瞥したあと、真仁に発した。

「見た目はもつとマシにしろと言っておけ」

「？ そう？」

キョトンとした青年に呆れたように溜息を吐き出す。

「もつと食べさせる。それと髭ひげも剃れと言え」

「ああ……それもそうだね。ヒゲを剃れば、なかなかイイ男なんだよ彼」

「その方が客も増える」

「言っておくよ」

「タバコを止めやさせれば太り出す」

「んー、それ難しいね。戒に至っては」

困ったような顔をして頭をポリポリとかく真仁に、直貴は少し睨みを利かせる。

「タバコには味覚を鈍らせる毒物が入っている。だからタバコを止めれば……」

「戒の吸ってるタバコには毒物いっさいは一切、入ってないよ」

「！ 何……？」

「だから、あれはクソ不味いタバコなの」

「なんだってそんなモノ吸ってんだよ」

「ボクが知るワケないだろ」

禁煙用ならば電子タバコがある。しかし、戒の吸っているタバコは煙が出るだけの無害なシロモノだ。

味も臭いも格段に不味い。タバコを吸っていない俳優がドラマに使用するタバコである。ユニークアイテムとして市販されているタバコで値段は安い。

「でも、彼のタバコ吸う姿はカッコイイと思うよ」

クールで渋い。と言った真仁に、直貴は眉間にしわを寄せた。

「お前……奴に惚れてるのか？」

「ボクにはそんな趣味無いよ」

でもまあ……と付け加えた。

「彼なら、抱いてみたいかも」

「!？」

青年の言葉にギョツとしながらも、自分の想像とは逆の言葉が返ってきてそれにも驚いた。

「何？」

「いや……なんでもない」

「ボクを変態にしないでくれよ」

「解ってるよ」

直貴が部屋から出たあと、真仁は戒の映像を見つめてニヤリとした。

「明日が楽しみだね」

仕事の終わった戒を確認し、彼のヘッドセットにつながる通信ボタンを押した。

「なんだと……？」

くさすがに今日中には太れないだろうけど、ヒゲの方はよろしくね」
「そこまで俺に命令する気か」

<それくらいの要求は聞き入れなよ>

「……チッ」

牧場から出て、通信の切られたヘッドセットを乱暴に外す。腹立たしげに建物に入り、いつもの部屋のドアノブに手をかけた。

「！ 戒！」

そして、いつもの青年の笑顔が彼を迎える。紙コップにコーヒーを注ぎ、タバコを1本、取り出す。

翼はそのタバコを、いつも不思議そうに眺めていた。その臭いと煙の色で、無害なタバコだと解る。

「……」

戒は火を付けて目を細めた。彼は元々、喫煙者ではない。

このタバコを吸い始めたのも、死んだ恋人のひと言だった。

第3章　命の探求

恋人がジョークで買ってきた無害タバコ。それを吸った彼の姿に、彼女は笑顔を見せた。

『うん、すつごくカッコイイ』

それから何度か吸っていたら習慣になった。恋人が死んでからもその習慣は消える事はなく、むしろ苦い記憶を塗り固めるように吸い続けた。

タバコを手に入れば脳裏に浮かぶ記憶……こびりついたその記憶に顔をしかめながら、まだ忘れたくないとでも言うように火を付ける。

まだそのなめらかな肌も、艶のある髪感触も愛を語る美しい声も覚えていた。自分を追い詰めている記憶だという事も……十分に解つていても、忘れたくはない。

彼女の父が死んだ時、墓に花を供えに来た戒を彼女の母が見つけた。だが、彼女は彼を追い出す事はなく、顔を伏せて小さくつぶやくように発した。

「娘の事は……忘れてちょうだい」

戒の苦しみに歪んだ顔を見て憎しみは消え「あなたが苦しむ必要は無いのよ」と言いたかったのか、憎しみは消える事なく「娘の記憶を持ち続けて欲しくないから」と言いたかったのかは解らない。

しかし、彼には彼女の母の言葉は耐え難いものだった。彼女の言葉確かめる勇氣も無く、それから数ヶ月後に彼女は末期癌のため他界した。

マンションに戻った戒は、洗面台の鏡に自分の顔を映してシェーバーを手にする。

「面倒な……」と、つぶやき電源を入れ無精髭ふしょうひげに当てた。

硬い毛が剃られていく音が狭い部屋に響く。そうして、軽く水洗

いし顔を洗ってキッチンに向かった。

ブランデーのボトルとグラス、氷を手にしてリビングのソファに腰を落とす。氷と酒をグラスに注いだあと立ち上がりベランダに出た。

「……」

相変わらず見下ろす塀の中は薄暗く、陰気だった。

*ショーの開始

次の日、例のショーのため戒^{カイ}はモニタールームを訪れた。

「！ やあ、格好良くなつたじゃない」

「言ってる」

「鉢合わせしたら無条件で戦闘開始ね。クローンがそこにいたら殺してもいいから」

「！」

「今回の獲物じゃないからクローン1匹につき0・5ポイントだけどね」

真仁^{まひと}の言葉を聞きながら、武器を確認していく。両足の太ももにレッグホルスターでリボルバーを2丁、腰には背後にバックサイドホルスターでオートマチック拳銃P226を丁。

そしてショルダーホルスター左脇にデザート・イーグル1丁を仕舞っていく。刃物はいつものように、美しい波形のクリスタガー。

「！ また新しい武器？」

戒の右の腰にぶら下がっている武器を見つけて、青年は嬉しそうに問いかけた。

「？ 警棒？」

首をかしげている青年の目の前で戒はその30？ほどの棒状のものを手に取り正体を示す。ガシヤンガシヤン……！ という金属音と共に、その棒状のものは1m50？ほどに伸びた。

「！ 棍^{こん}か……」

戒はそれを2〜3度振り元に戻す。いつもよりカートリッジと武器の数を増やし牧場に向かった。

「彼は知ってるのか？ 自分たちが賭けの対象にされていること」
モニタールームで、部屋の正面の壁に掛けられている大きなディスプレイを眺めながら直貴^{なおき}が発した。

「知らないワケないでしょ」

真仁は相変わらざるのニヤけた顔で応える。

「……時間制だっけ？」

「うん。4時間以内に何人殺せるか」

そして、思い出したように直貴を一瞥し戒の顔をアップにして示した。

「ね？ カッコイイだろ」

「ん……？ ああ、まあな」

女の客が増えそうだ。直貴はそう考えてあごをさする。

今回は誰が生き残るのかも賭けられる事になった。リアルタイムで変動する倍率を横目で見ながら、開始の時を待つ。

「戒は生き残るかな？」

「生き残るよ」

真仁は当然のように発した。それは確信。彼が生き残らないのなら、彼以外は全て死ぬ。青年はそんな顔で画面を見つめた。

「そついや面白いツールを頼まれたって？」

「うん、赤外線カメラをね」

直貴は口笛を鳴らした。赤外線カメラを見て、それをしっかり認識し行動できる技術を持っている戒に感心する。

さすが元・特殊部隊……と直貴はつぶやいた。

太陽は真上よりやや斜め、14時を少し回った処か。

「……」

戒は開かれた扉に吸い込まれるように入っていった。いつも同じ高い塀は、広大な敷地内にあっても反対側の塀がちらりと覗く。

全てを遮断された世界——獲物として殺されるだけの存在。風俗や玩具としてのクローンなら、それなりの教育は受けられる。

だが、ここに詰め込まれているクローンたちは『家畜』として生かされているだけだ……

<前方にハンターがいるよ>

「！」

真仁の声にハッとすると。

「……」

感傷に浸っている時じゃない。戒は頭を軽く2〜3度振って思考を切り替えた。今回のターゲットは識別チップを持たないハンターだ。気配を探る他に見つける方法は……戒はヘッドセットのボタンを押した。

右目のディスプレイの画面が赤に変わる。人がいる場所がその形に真っ赤に表示された。チップを埋め込まれているクローンなら、真っ赤に表示される他にチップの識別信号が出ている。

「こいつは違う……。！　そこか」

戒は言うが早いかりボルバーを素早く引き抜き、出会い頭に引鉄ひきがねを引いた。

「がふっ！？」

銃弾は男の頭部に命中し、派手に血しぶきを上げてつつぷす。転がった死体を一瞥し気配を探りながらリボルバーを握りしめ少しずつ足を進めた。

無駄のない動き。相手はクローンではない、対抗し抵抗する武器を持ったハンターだ。戒はそう言い聞かせ確実にその足を前に踏み出した。

「まず1人……か」

真仁がディスプレイを見つめぼそりとつぶやく。今までにない慎重な戒の動きにその瞳を潤ませた。

やっぱり素晴らしいね……嬉しそうに口の中で発する。狡猾でなめらかな黒豹——小綺麗にしてきた戒の存在感はさらに高まっている。

「君が言ってくれたおかげだよ」

「そう言ってくれると嬉しいね」

真仁は画面を見つめながら発し直貴はしれつと応えて乾いた会話

を交わす。

戒の所属していた特殊部隊は、確かにずば抜けた精鋭ばかりを呼び集め組織されていた。その部隊が解散となり自衛隊に残る者、戒のように辞める者、辞めて海外の傭兵部隊に入る者。それぞれだ。彼と同じく、ハンタードッグになった者も多くはない……かつての仲間を戒は殺した事がある。そこにはもう、深い悲しみも情も……何も無かった。

仲間にポイントを譲ることも出来た。

だが、同じ部隊にいた仲間なら自分を殺してくれるのでは——戒はそんな希望を抱いたが生き残ったのは自分だった。

その壮絶な闘いは今でもハンタードッグの間で語りぐさとなっている。

*その命

「！」

しばらく様子を窺いながら歩いていた戒カイのディスプレイに2人がまとまって表示された。その2人の声が聞こえるギリギリに気配を殺して近づく。

「ポイント30ある。俺の命と引き換えに願いを叶えてくれ」

「とにかくやめろ」

どうやら何か言い争っているようだ。

「兄貴！ 誓ってくれ。頼むよ」

「！」

兄貴？ この2人は兄弟か。戒の眉間にしわが刻まれる。少し顔をずらして確認した。すると、男の1人が自分の頭に自身の持っているハンドガンの銃口を向けている。

どちらも20代半ばほどだろうか、顔立ちは似ている。やはり兄弟のようだ。

「……」

自ら死ぬつもりか……戒は小さく舌打ちした。

＜それ、よく見せてよ＞

ヘッドセットから真仁まひとの声が響く。

「むやみに顔は出せん」

あの男の言動から察するに……引鉄ひきがねは引かれるな。戒は、それが出来るであろうその男が少し羨ましかった。

「！」

乾いた音が小さく響き渡る。

「……」

ちらりと覗いた。

「空……ばかやろう」

残った男はか細い声で力なくつぶやき、肩を落として倒れている

青年を見下ろしていた。

< 双竜だな。残ったのは兄の大地だ >

「！ ほう……」

ヘッドセットに指をあて、続きに聞き入ったその時——残った男は叫びながら戒の横をかすめて走り去った。

< 狂っちゃったかな？ >

「悪趣味なシヨーをするからだ」

戒の呆れた言葉に、向こうの真仁は絞り出すように笑った。

それからまた、探るように歩き出す。戒はなんとなく灰色の建物の1つに足を踏み入れた。

「……」

何もない、ただ四角に造られただけの部屋。そこには家具も家電も、およそ人が生活するようなものは置かれていない。

ただ食べ、眠るだけでいいからだ。娯楽など与える必要は無い。

「……？」

その部屋の中心にゴミが溜まっていた。薄暗い空間に目を凝らして近づく。

“ザザッ……”

「！ チッ」

ヘッドセットの調子が悪いらしい、画面が消え音も途切れた。さらに警戒を強めゴミに近寄る。

「……」

紙くずを足でよけてしゃがみ込む。

「こいつは……」

一瞬、それを凝視して目を細めた——

「あーもう！ ポンコツ掴まされたか？」

真仁は、戒につながっていた砂嵐のディスプレイに頭を抱えた。

「ヘッドセットの不調とは運がないな」

直貴なおきは苦笑いを浮かべる。

「何か見つけたのかな？」

さらに直貴は口を開いた。しゃがみ込んでいる戒の後ろ姿が映し出されているディスプレイを真仁も見つめる。

「回収し損ねたクローンの骨とかはよく落ちてるけどね」

「ハンターが残してた空薬莢^{からやつきょう}とかもだろ」

殺したクローンの回収は雑だ。殺し方によっては識別チップが破損する場合もある。そんな死体の回収は見落とされる事がよくあった。

大抵は、ハンターが見つけるその死体は食い散らかされたあとだったりする。何に？ 決まっている、他のクローンたちである。死んだものは食料にしかない。

その光景に出くわし、吐いたハンターもいた。誰だって気持ちの良いものではないだろう。戒は運良く、そういう光景に出会った事はない。

動物としては自然な事だが、それが人間と同じクローンともなると見るに堪^たえない光景だろう。

「は……」

戒の口元から、自然と笑みがこぼれていた。

「生物は常に生き残る術^{すべ}を模索^{もさく}する……か。よく言ったもんだ」

俺が生まれる前に創られた映画のセリフだ。数学者の役だった俳優が言っていた。戒はそう思いながら、伸ばした手の先にある小さな遺体を見つめた。

子どもが作れないハズのクローンの囲いの中に、赤子の遺体――

死産だったのか、産まれてから死んだのかは解らない。すでに水分も無く、軽い感触だった。

“ザザ……”

「！」

戒はとっさにその小さな亡骸^{なきがら}を掴み、コートのポケットに乱暴に詰めた。

<何か見つけたの？>

「菓子かしの袋だ」

<どっかのハンターが捨ててったのかな？ マナー悪いなあ>

戒はそれに鼻を鳴らし立ち上がる。腕の時計を見ると時刻は15時をかなり過ぎていた。

「……あと2時間か」

つぶやき、足早に建物から出た。

「真仁」

<何？>

戒は、モニタールームにだけ繋がれる音声ボタンを押しささやくように発する。

「人とクローンの違いはなんだろうな」

<？ さあ、なんだろうね>

今やクローンは人の胎内を介さずに作成可能となった。大きなガラス管に浮かぶクローンたち。管理され、それぞれに納品・保管されていく。

「それでも……」

<何？>

人とクローンは変わらない。ただ産まれ方が違うだけだ。同じように教育すればどこも違いはないはず。現に風俗にいる女の何人かは客から知識を得て人間と見分けが付かないと聞いた。

いつか、クローンたちは生物の生存としての模索を実行するのかもしれない。そこまで考えて戒は1度、目を強く閉じた。

「最低、あと2人は倒す」

<期待してるよ>

戒はそう言い放ち、傾きかけた太陽を背に駆け出した。

「戒かい……」

翼は1人、部屋の中で長机に腕を乗せてその手を組んでいた。冷めたコーヒーにぼんやりと視界を合わせ、部屋は沈黙に満たされる。いくらクローンでも、殺す事に抵抗が無かった訳じゃない。それ

でも、この仕事は高額な報酬が得られる。その魅力に惹かれない者はいない。

翼もその1人だった。何の知識もなく武器を手にした訳でもない。このご時世、銃の1つも扱えないようでは生きてはいけなかった。それがいつの間にかハンタードッグという仕事を紹介され、この組織に入りその可愛い顔立ちにロリコン趣味の金持ちから人気が上がった。

危うくそんな男の1人に売られかけたが、戒がそれを救ってくれたのだ。モニタールームで抗議している処に戒が入ってきて「雇われの管理くらいはしたらどうなんだ」と、ぶっきらぼうに真仁に意を見た。

それまで、翼は戒が怖くて仕方がなかった。誰とも喋らず、愛想は1つも振りまかない。挨拶しても目で応えるだけ。

「……」

そこまで考えて、翼は1人クスツと笑った。

第4章　傷跡のありか

そして翼は苦い顔になる。戒^{カイ}がどうしてこの仕事をしているのか……いくら考えても、同じ答えにたどり着く。

「そんなの……だめだよ」

薄暗い空間に翼の声が小さく吸い込まれた。

「……っ」

冷たくなったコーヒを一気に飲み干し、翼は部屋をあとにした。人がほとんど通らない通路はハンタードッグたちが集まる部屋と同様に薄暗く冷たく翼の足音を響かせる。

しかし、モニタールームに向かう足が止まってしまった。

「……行つてどうするんだよ」

真仁になんて言うのなんて考えてないし。どうやっていいのかも、自分が何を言いたいのかも解らない。

彼を見たら、訳の解らない事をまくし立てるだけのようないきがしてきた。そもそも、どうしてそこまで戒の事で自分がしゃしゃり出るのか訊かれても応えようがない。

「だめだねこりゃ……」

音のない通路で翼は溜息混じりに薄く笑った。どうにもまとまらない自分の感情に、つい飛び出してきたものの吐き出せない苦しみに自身の胸ぐらを掴む。

「何やってんのかなあ僕は……」

がつくりと肩を落として自分のアパートに足を向けた。

* 生き残る者

「おい、あそこ」

「ん？」

いくつかのディスプレイを見ていた直貴^{なおき}が1つの画面に気がつく。そこに映っているのはハンターだ。別の組織の男らしいが、戒の画像と照らし合わせると……

真仁^{まひと}は戒の後ろ姿が映ったディスプレイを見ながら通信ボタンに手をかけようとした。

「！」

しかし、声をかける前に戒がピタリと立ち止まる。それを確認し、ボタンからゆっくり手を外した。

「見えてないんだろ？ あれ」

「うん。そのはず」

直貴がそれに口笛を鳴らす。本来、ハンターたちはクローンを相手にするため卓越した戦闘技術は必要ない。

戒のように識別コードを表示するヘッドセットを装着する組織にいるハンターたちには尚更だ。

しかし、彼はその戦闘における洗練された感覚を衰えさせる事はなく……真仁をさらに喜ばせた。

「……右と、左に1人ずつか」

戒は立ち止まり微かに目を左右に動かす。

「……」

近いのは……

「右か」

戒はリボルバーを取り出して右に駆けた。驚いたのはそこにいた男だ。待ち伏せしている自分に向かって、ためらいもなく相手が近寄ってくる。少し小太りの男は慌てて後ずさりし角に身を隠した。

「……」
戒は通路に銃口を向けたが、そこに男はいない。だが、その向こうにいる事は気配から解っていた。リボルバーを下げて少しずつ近づく。

「……くそ！」

小太りの男は意を決して持っているハンドガンを構え飛び出した。戒と目が合う。

すると――

「！」

戒の背後に別の男がハンドガンを構えた。左に隠れていた男だろう。この2人、目元が似ている……兄弟か。

イレギュラーの話は聞いているらしい。2人の間で「それならば兄弟で立ち向かってやろう」という結論に出たようだ。

「ありやりや……形勢不利だな」

直貴があごに手を当ててつぶやく。しかし真仁の表情は変わらなかった。揺るぎない勝利の確信、真仁の表情からそれが窺える。

直貴は正直、そこまでの男を信頼している真仁が信じられなかった。

金持ちの道楽――持っている金を持てあましていた処に、牧場のスポンサーという話が転がり込んできた。

直貴はそれに興味を持ち、紹介された組織が真仁の組織だった。

自分より年下の青年をどう扱っていいものか……当初は悩んでいたが付き合ってみるとそんな事を考えていた己が馬鹿馬鹿しく感じた。

『頭脳明晰』

真仁を表すにはその言葉が一番、合っている。飄々（ひょうひょう）とした態度の裏側を知ると、敵に回したくない相手である事は明確だった。

そんな事を考えながら直貴は再び戒が映っているディスプレイに視線を向けた。

「……」
戒は前後にいる2人を交互に一瞥^{いちべつ}する。そして、持っているリボルバーのトリガー部分に指をひっかけ、降参の意思を示した。それをポンと軽く真上に投げる。

「！」
40代ほどの兄弟はそれに一瞬、気を取られた。

「——！」
戒はその瞬間に右太ももに装着しているレッグホルスターからリボルバーを引き抜き前の男に弾丸を放つと同時に、左手で右腰に装備していたナイフを素早く抜いて後ろの男に投げつけた。

「ぐおっ！？」

「がはっ！？」

痛みと苦しみの声を上げ2人の男は倒れ込んだ。

「……… すごい」

直貴は感嘆の声を上げる。複数で組むメリットは、単独のハンターと出くわしたとき有利という処だ。

「数に勝るものはない——その余裕が今回は死を招いたとも言える。ね？ 勝ったろ」

当然のように発する真仁に眉をひそめる。ただ闇雲に戒の勝ちを確信していた訳ではなく、戒の洗練された戦闘技術を理解したうえでこの青年は語っていたのだ。と、ようやく直貴も理解した。

「………」

戒は無言で動かなくなった男の胸からナイフを引き抜き、まだ呻^{うめ}いているもう1人の男を見つめた。銃弾が当たった場所は……致命傷だろう。戒は目を細めてそこから立ち去った。

しばらく歩いて腕時計をちらりと見る。あと30分は残っていた。しかし、彼はドアに向かって足を進める。

「随分とタンパクなんだねえ」

画面越しに見ていた直貴は少し拍子抜けした。

「がっつかない処がいいんだよ」

真仁の言葉に直貴は半ば呆れる。そこまで戒にご執心しやくしんとはね……
本気でアツチの趣味に走りかねないんじゃないかと身震いした。

「ボクを変態にするなって」

「!？」

目を向けないで応えられ直貴はポリポリと頭をかいた。

「さすがだね」

戻ってきた戒に両手を広げ真仁は笑顔で迎えた。直貴はすでに帰ったあとで、戒は一度も直貴と会った事はない。

「……」

真仁の言葉に無言でヘッドセットを外してデスクに乗せる。

「ああ、そうそう」

立ち去ろうとした戒に、真仁が思い出したように発した。

「君が見た双竜ね、どうやら弟は風俗店のクローンにご執心だったみたい」

「! ……それで何故、ああなる」

「その店はね、彼らが契約してる組織の直営店だったんだって」

雪と呼ばれていたクローンの女を空は愛してしまった。消えゆくように美しく、儚いイメージを持っていたクローン……

「そのクローン、処分される予定なんだ」

「!」

戒は目を見開いた。

「我が儘わがままを言ったからだってさ」

「どんな」

「『空以外の人間には抱かれたくない』だそうだよ」

戒は眉をひそめてモニタールームをあとにした。

「だから、その貯まったポイントで雪ってクローンを自由にして欲しいと兄に頼んでいたのさ」

ビルの通路を歩く戒の頭に真仁の言葉がこだまする。

「……」

『心』を持てば罪になる——玩具としてならそれは当然なのかもしれない。

クローンはコピーではない。そんな事が出来るほど人の遺伝子は単純ではなく、育った環境や性格によっても容姿は変化する。

「違いはなんだ……？」

俺には解らない……と戒は2、3度、頭を振って足早にマンションに向かった。

途中、ホームレスたちが暖を取るため炎のくべられたドラム缶に持っていた赤子の遺体を投げ入れた。

「？」

ホームレスたちは何を入れたのか解らずに首をかしげるが、戒は構わずに歩き出す。

「死ぬべき者が死ぬ訳じゃない……」

神などいやしない。否、神に自由にされる事が許せない。だから、神などいない」と言いたいのだ。

その心の奥底では、神に願っているというのに……

* 青年についての考察

「……」

真仁は戒のVTRを1人モニタールームで眺めていた。時刻は深夜12時を少し回った処か。

暗い部屋にディスプレイの光が異様な光景を作り出す。青年は戒の姿にうつとりするような瞳を浮かべた。

彼が何故、この組織のトップにいるのか……それは謎に包まれている。真仁は自分の事はあまり話さない。

27歳で両親はいない。病死なのか事故死なのか？ 彼が殺したという噂まで流れている。

彼がトップを勤めるこの組織は他の組織と違ってハンタードッグたちは意外と自由に使っていた。経営しているクローン風俗店も無い希望されるクローンを作成し、それを売買する他はハンタードッグの管理だけでこの組織は成り立っている。

かなり特殊だといっていい。双竜のいる組織は言ってみれば、正しく『悪の組織』をしている。

トップにいる戸塚という男は、強欲を絵に描いたような人間だ。真仁は組織のトップとして戸塚とも付き合い合わなければならないが、それがなければ決してあの男と仲良くはしたくないと思った。

若い真仁を見た瞬間の反応はあからさま……そして大きな力を持っていると知った時の反応も実に解りやすかった。

真仁の組織は非合法な活動をしていない。なのに、この組織は上位に位置している。それは本来ならあり得ないと言ってもいい。

クローンが世界的に認められてから、情勢は微妙な均衡を保ちつつも変化していった。日本は最たるものだろう。

野生動物は7割が保護の対象になり、富裕層と貧困層の格差はさらに広がってその鬱憤晴らしでもするように『牧場』が誕生した。

この牧場を運営しているのは日本の組織ではなく、アメリカの企

業だ。あちこちの国で非合法な方法を用い、のし上がってきた。

「うーん……やっぱり渋いな」

と、真仁は戒の動きにニヤけた表情を浮かべた。本人は「変態じゃない」と言い張るが、そんな言葉に納得出来る者はいそうにない。青年は、むしろ戸塚という男の方が変態だ。と思い起こす。真仁に取り入るうとしてゴマすりよろしく、必死で贈り物をせこせこと送りつけてきた。

挙げ句の果てに、なかなか自分になびかないものだから真仁はホモだと思ひ少年のクローンを送ってくる始末。

さすがにこれには参った……真仁は頭を抱え、その少年をモニタールームで雇う事にした。

いわば“お茶くみ”だ。真仁の言ったものを運んでくる。もちろん、『所有物登録』を済ませて自分の家に住まわせている。

そうしなければ違法だとみなされ政府に連れて行かれ殺処分されてしまう。彼はそれを了承するほど悪人でもない。という事だろう。そんな真仁が何故、こんな非合法の組織に荷担しているのだろうか——？ とにかく、真仁という人物については謎だらけなのである。

「あ、革製の服なんかだともつと格好いいかも？」

真仁はぶつぶつと、戒のVTRを見て独り言をつぶやく。その右手首にはプラチナのバングルが輝いていた。

落ち着いたツタの模様が描かれた品の良いシロモノだ。彼の外見と違和感無く、ひっそりとそこにあった。

＊終焉の時・しゅうえんるとき・

それから1ヶ月が過ぎた――

「えっ！？ 戒カイが？」

翼は仲間から聞いた言葉にモニタールームに駆け出す。

「真仁まひと！」

勢いよく扉を開くと、戒と真仁が向き合って話し合っていた。

「翼くんどしたの？」

真仁が少し驚いて問いかける。翼はゆっくりと近づきながら2人を交互に見つめた。

「戒……仕事辞めるってホント？」

「ああ」

「残念だよねえ」

「……」

翼はその後の言葉が見つからず、しばらくふさぎ込んだ。そして喉を詰まらせながら戒に発する。

「これからどうするの？」

「……」

戒は翼を見下ろし視線を宙に移した。

「モンゴルにでも行ってみようとな」

「！ モンゴル？」

どこまでも続く大草原――戒の脳裏にその壮大な景色が浮かぶ。

「引き留めようと思ったんだけどね。だめだったよ」

真仁は肩をすくめて薄笑いを見せる。

「まあ、今までよく貢献こうけんしてくれてたし。ポイント換金も多めにし
てあげる」

「すまん」

「惚れた弱みかな……」

真仁は戒を少し見上げ顔を近づけた。

「いっ！？」

翼がズサッ！ と1歩、後ずさって思い切り目を丸くした。

「……」

およそ10秒ほど真仁は戒の唇を味わうと口の端をつり上げて離れる。その時、潤んだ瞳でぼそりとつぶやいた。

「これで君を忘れない」

戒の記憶を焼き付けるために……決して忘れないように、真仁はゆつくりと男を見つめる。

「男とキスしたの初めてだけど。案外、いいもんだね」

唇をペロリと舐めて、しれっと言い放った。

「……」

翼は何も言えずにじっと立ちつくす。

「ボクは変態じゃないぞ」

真仁はそれに眉をひそめて応えた。

「あ、うん……」

充分、変態だと思うけど……という言葉は飲み込んだ。

「君の望みは叶わなかったようだね」

「！」

真仁が静かに発すると戒はそれに視線を泳がせた。そんな戒を見て真仁は小さく笑う。

「君には無理だよ」

「どうしてそう思う」

「だって――」

君は、優しすぎるから……例え己の命でも、奪う事が出来なかったんだよ。と真仁は緩やかな瞳を向けた。

「……」

戒は苦い表情を浮かべ目を閉じて薄く笑う。

「これまで大勢殺してきた人間に言う言葉とは思えんな」

「他のハンタードッグに殺されるより、彼らは幸せだったよ」

苦しまずに死ぬ事が出来たんだからね。真仁は皮肉混じりに言い

放つ。

死ぬ事が定められたクローンたち。彼らに生まれた意味はあったのだろうか……？ いや、意味など………どうでもいいんだ。それはこれから見い出すかもしれない、見つけるかもしれない。他人が決めるものじゃない。

「君を殺せる人間なんて、いると思ってた？」

「！」

真仁がフ……と笑って腕を組む。戒は眉間にしわを寄せたが、すぐに視線を外した。

「解ったから、諦めたんじゃないの？」

「さあ………どうかな」

叶わなかった俺の望み。だが、別のモノを得た感覚だ。

「生きていて……」

そんな菜都美なつみの声がした気がした。聞こえるハズもない声に、俺は従おうとしている……戒は心の中でつぶやく。

そして戒は翼の頭にポンと手を乗せ、小さく笑った。

「！」

「お前も、こんな仕事からは早く足を洗え」

「戒……」

優しい瞳で翼を見下ろし、戒は真仁に視線を少し投げて睨みを利かせながら発する。

「あんたも、そろそろお開きにした方がいいんじゃないか？」

「そうだね。ボクもそう考えていたよ」

君がいなくなったら途端につまらなくなりそうだし。と真仁は二ヤけた顔を見せた。戒はそれに口の端をつり上げる。

そうして戒は翼に別れの挨拶として軽く手を挙げ、部屋から出て行った。

「止めなくて良かったのかい？」

「……」

翼はしばらく無言で目を伏せた後、何かを決心したように顔を上

げ真仁に向き直る。

「真仁、僕も頼みがある」

「何かな？」

真仁は何かを悟った物言いで聞き返した。

最終章　草原の果て

それからさらに1週間後――戒^{カイ}はモンゴルの平原を見渡す。かつて恋人と訪れた果てまで続く大草原。

「……」
目を細め、その緑の大地を眺めた。近代化が進んでいるモンゴルだが、この草原だけは自然保護区として維持されている。

しばらくそうした後バギーにまたがり平原を走る。

「！」
遠くに人影がぼつりと見えた。自分と同じような物好きがいるのか？

「……？」
戒はいぶかしげにその影を見つめる。広い保護区の端、観光客も滅多に訪れる事の無い場所に人がいる事は驚きだ。

「！？　まさか……？」
その影に見覚えがあった。そんな事がある訳がない……そう言い聞かせるが、その影は戒の姿を見て手を振った。

* 微笑みの向こう

「戒！」

「翼か！？」

嬉しそうに駆け寄る翼に戒はバギーを降りる。青年は目の前まで来ると、少し荒くなつた息を整えながら戒を見上げた。

「何故ここに……」

目を丸くしている戒に翼はニコリと笑いかける。

「僕も辞めてきた」

「両親はどうした」

少し怒つた口調。翼はそれに小さく笑つて視線を宙に移した。

「2年前に2人とも死んでるよ」

「！」

目を合わせようとしない翼に溜息を漏らす。

「戒は……兄さんみたいなんだ」

「！」

ぼつりとつぶやく。そして、再び念を押すように戒の目を見据えた。

「兄弟はいないけど、そんな感じがするんだ」

苦笑いの混じつた言葉。戒は困つたように微笑む翼に目を細める。翼の言葉に驚きながらも、何故か少し「そうかもしれない」とも思つた。

「俺にも兄弟はいない」

「戒って本名はなんて言うの？」

「……捨てたよ」

そか……翼はつぶやいて草原を見渡した。

「じゃあ、僕も知らない。今の名前でもいいや」

戒は、そんな翼をじつと見下ろした。青年は戒の視線を誤魔化すように発する。

「良いところだね」

「ああ」

草原を見つめていた翼が可愛い笑顔で振り返り戒に言った。

「ね、戒の家につれてってよ」

戒はその笑顔にかつての恋人の微笑みを重ねる。

「……」

俺が生きる意味を、お前は与えてくれたのか？　そう思えてならなかった。

「弟か……」

本当にいたとしたら、こんな感覚なのかもしれないな。戒は、薄い雲がまばらにかかる空を見つめて新たな家族が出来た事に小さく笑みを浮かべた。

緑の風が頬を滑っていく——今までの事、そしてこれからの事を2人はいつまでも語り合った。

END

* 微笑みの向こう（後書き）

* まだまだ未熟な私のお話に最後までお付き合いくださりありがとうございます。
うございます。

読んでくださった皆様が少しでも楽しんでいただけたなら幸いです。
2011.2.4 河野 る宇

作中に登場する大地、空、雪、戸塚の4人は瀬田一郎さまのキャラクターです。これらのキャラクターは瀬田一郎さまの著作権下に
あります。

* 続編「踊れ その果てで? <ケルベロスの牙>」
よろしければ読んでみてくださいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4498q/>

踊れ その果てで * エデンの園

2011年8月30日03時25分発行